

「元気な鶏から最高のたまごが生まれる」を モットーに直販の実践

愛媛県四国中央市
有限会社 熊野養鶏

1 地域の概況

熊野養鶏の所在する四国中央市は愛媛県の東端部に位置し、東は香川県に面し、南東は徳島県、さらに南は高知県と4県が接する地域となる。県都松山市と高松市へは約80km、高知市までは約60km、徳島市までは100kmの距離にある。

地形は、東西に約25kmの海岸線が広がり、その海岸線に沿って東部には全国屈指の「製紙・紙加工業」の工業地帯を擁し、その南には広大な農地が広がっている。

さらに南には急峻な法皇山脈から四国山脈へと続く山間部を擁し、この豊かな自然により水という恵みを与えられ、産業や生活が支えられている。

また、当市は高速道路網の整備により、三島川之江・土居・新宮の3つのインターチェンジと川之江ジャンクションを持ち、四国の「エクスハイウェイ」の中心地となっており、各県の県庁所在地にはほぼ1時間で結ばれるという好条件にある。

当市の耕地面積は水田1,650ha、畑198ha、樹園地462haの合計2,310ha。総農家戸数は3,271戸で、販売農家戸数1,786戸、専業農家戸数471戸、農業就業人口は2,989人となっている（愛媛農林水産統計年報18～19年による）。

平成19年度の農業産出額は69億5000万円で、米7億7000万円、野菜16億4000万円の耕種合計が33億2000万円、畜産が36億2000万円（52%）を占めている。そのうち豚が15億5000万円、鶏は18億8000万円（畜産に占める割合は52%、農業全体では27%）となっている。愛媛県の鶏の産出額に対する比率は20%を占める。

平成21年2月1日現在の飼養戸数では乳用牛5戸、肉用牛10戸、豚23戸、採卵鶏18戸で採卵鶏羽数は愛媛県の22%を占めている。

2 経営・生産の内容

(1) 労働力の構成（平成21年6月現在）

区分	経営主との続柄	年齢	農業従事日数（日）		部門または作業担当	備考
				うち畜産部門		
構成員	本人	39	320	250	総括、成鶏の飼料給与、鶏ふん収集他	社長
	妻	39	300	100	店舗、食堂、経理	店長
	父	71	320	320	育雛・育成管理、鶏ふん処理等	取締役
	母	64	300	150	洗卵、食堂	
従業員						
臨時雇	延べ人日	0.5日×10人×300日		1,500人		

(2) 収入等の状況（平成19年7月～20年6月）

部門	種類・品目	飼養頭数・面積	販売・出荷量	販売額・収入額	備考
採卵鶏	鶏卵	20,275	405,505	98,211,461	
	鶏ふん			329,086	
	その他			2,596,620	
合計				101,137,167	

3 経営の歩み

(1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養羽数	飼料作付面積
昭和30年	養鶏	50	父親が養鶏経営を開始
〃 50年	採卵鶏	20,000	成鶏舎新築（10,000羽）
〃 56年	〃	20,000	松山自動車道の造成に伴う立ち退きにより、現在地に移転し、四国で初めての全自動鶏舎が完成する。
〃 58年	採卵鶏	40,000	法人経営に転換し、20,000羽を増羽する。
平成5年	採卵鶏	40,000	鶏卵の自動販売機を松山自動車道の出口に1号店5台設置
〃 7年	〃	40,000	現社長がUターンし経営に参画
〃 8年	〃	40,000	美豊卵の商標登録 自動販売機を6台増設し2号店を自宅前に出店

年次	作目構成	飼養羽数	飼料作付面積
平成 11 年	採卵鶏	40,000	3号店新居浜に6台出店
〃 12年	〃	40,000	4号店ジャスコ川之江店の近く3台出店
〃 13年	〃	40,000	代表取締役社長に就任
〃 14年	〃	40,000	鶏卵の小売販売に傾注しインターネット販売等による県外販売の増加に努力する。
〃 15年	採卵鶏	40,000	加工場整備 5号店山田井店舗開設
〃 16年	採卵鶏	40,000	鶏ふん発酵機・たい肥化処理施設設置
〃 17年	採卵鶏	30,000	自家配合発酵飼料の給与
〃 18年	採卵鶏	25,000	卵専門店「熊 ²⁹ 」の開店準備（資金・設計） 加工卵の開発
〃 19年	採卵鶏	20,000	卵専門販売店「熊 ²⁹ 」を開店、食堂を併設 1ケージ1羽飼養に転換 現在に至る。

(2) 過去5年間の生産活動の推移

	平成 16 年	平成 17 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年
畜産部門労働力員数（人）	5.5	4.0	2.5	2.5	2.5
飼養頭羽数（羽）	38,599	30,451	23,117	20,405	21,400
販売・出荷量等（kg）	733,396	578,564	470,976	405,505	438,698
畜産部門の総売上高（円）	144,791,509	119,488,029	108,300,806	101,137,167	114,332,082
主産物の売上高（円）	140,812,078	118,079,797	106,293,551	98,211,461	110,557,997

4 特色ある経営・生産活動の内容

- (1) 飼養規模は、約3年前までは約4万羽を1ケージ2羽飼いで飼育していたが、徐々に減羽し、現在では1ケージ1羽の飼育で20,000羽を飼養しているため、余裕を持った飼養管理となっている。また、従来は強制換羽も実施していたが、鶏卵の品質と生産性を考慮するとともにサルモネラ等の発生確率を考え、安全性の高い卵を生産するために現在は中止している。このため更新率は高く100%となっている。
- (2) 飼育環境は開放鶏舎であるが、換気扇などの活用により通風・換気に注意し、「元気な鶏から最高の卵が生まれる」ことをモットーで国産にこだわり、国内の卵用鶏では数%しか飼われていない純国産鶏の「もみじ」を飼養している。「もみじ」の特徴は国産唯一の赤玉鶏で日本

の風土に合い、大型で丈夫な鶏で、黄身も大きく、安全でおいしい卵を生産すること。また、卵の70%以上は水分で、鶏が飲んだ水が卵に移行するので、水にもこだわりをもち、「プロスアクティブウォーター」「FFC 原始活水器」「EM セラミック」で処理した、生物の機能を高めるといわれている水を与えている。また、給与飼料の60%を占めるトウモロコシはPHF（ポストハーベストフリー）を使用するなど「エサ」にもこだわり付加価値を高めた「美豊卵」（びほうらん）を商標登録し、地域消費者やインターネットでの通信販売により収益性を高めている。

- (3) 鶏卵の品質向上のために飼料は自家製の発酵飼料を使用している。これは、昔から「人間が食するもので味噌、しょうゆ、納豆などの発酵食品は体によい」とされていることから、鶏にも発酵した飼料を給与することによって、健康に育ち、美味しい卵の生産ができるとの考えから実践している。

また、卵の質は給与飼料で決まるといわれている。一般的には市販の添加物を餌に混ぜて与える方法がとられているが、当農場では発酵飼料をメインに海草粉末・もみがら炭・ガーリック等10種類以上の厳選した副原料により配合割合を研究した飼料であり、ビタミン・ミネラル等の成分が高くなっている。

- (4) 鶏卵販売については県内5ヵ所に鶏卵自動販売機を25台設置し、新鮮な卵を消費者の近い場所で購入してもらえよう直販にも力を入れている。さらに、インターネットでの通信販売にも力を入れて県外への直販向上に努め販売価格をアップしている。

また、販売における付加価値の創出のためには、これらの取り組みだけでなく、特色ある加工品も作っている。特にこだわりを持って作っているのは、燻製卵「薫ちゃん」で、燻製独特の香りを引き出すのは桜のチップを使用している。このチップは試行錯誤しながら最良の香りを引き出すために苦労をした結果である。その他温泉卵の「泉ちゃん」とほんのり塩味の「塩味ちゃん」を販売している。地元のTV番組にて「川之江の名産」として放映され、消費拡大につながっている。

- (5) 当養鶏場で生産する「美豊卵」は、原原種鶏から卵までの一貫したトレーサビリティが可能で、付加価値の高い商品として事業の柱にするという狙いがある。「美豊卵」とは先代の社長である父親が美「美味しい卵」豊「豊かな食卓」卵「産みたて卵」のフレーズをもとに命名した。

- (6) 平成19年11月に卵専門店「熊²⁹」を開店。「美豊卵」の美味しさを実感してもらうことを目的に「たまごかけ御飯」の専門食堂を併設し、新鮮な卵の販売の他に定食を提供している。昼食時には、定食を求めて近所の主婦や、家族連れ、口コミで広まった若い人たちも訪れ、固定客も徐々に増えてきている。メニューは、ご飯・味噌汁・漬物がセットの「たまごかけ御飯」とこの定食にオムレツが付いた「オムレツ定食」の2つがあり販売拡大の1つとなっている。



成鶏舎の全景



開放鶏舎であるが、換気扇等の活用により通風・換気に注意し、1ケージ1羽飼育にしている



販売における付加価値の創出のために、特にこだわりを持って作っている、燻製卵「薫ちゃん」



鶏卵販売については県内5ヵ所に鶏卵自動販売機を25台設置している



鶏卵の品質向上のために、飼料は自家製の醗酵飼料を使用している



卵専門店「熊」。「たまごかけ御飯」の専門食堂を併設している



「たまごかけ御飯」と独特の醤油がさらに食欲をそそる



生産現場を動画で提供するなど、畜産に対する理解醸成とともに、消費拡大に努めている

5 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績（平成18年7月～平成19年6月）

経営の概要	労働時間	家族・構成員	9,920 時間	
	(畜産)	雇用・従業員	8,117 時間	
	<労働従事人数（家族・構成員）>		4 人	
	<労働日数/1人（家族・構成員）>		310 日	
	労働力員数	家族・構成員	5.0 人	
	(2,000時間換算)	雇用・従業員	4.1 人	
	(畜産)			
	成鶏平均飼養羽数		23,117 羽	
	年間鶏卵生産量		470,976 kg	
年間鶏卵出荷量		470,976 kg		
収益性	採卵鶏部門年間総所得		15,810,761 円	
	成鶏 100 羽当たり年間所得		79,660 円	
	所得率		14.7 %	
	成鶏 100 羽 当たり	部門収入		468,263 円
		うち鶏卵販売収入		463,877 円
		売上原価		440,368 円
		うちもと雛費		24,032 円
		うち購入飼料費		201,893 円
うち労働費		101,157 円		
うち減価償却費		17,665 円		
生産性	成鶏 100 羽当たり年間鶏卵生産量		2,037 kg	
	成鶏 100 羽当たり 1 日当たり産卵量		5.6 kg	
	鶏卵 1kg 当たり平均販売価格		228 円	
		GP		140.0 円
		産直		287 円
	直販割合		60 %	
	成鶏 100 羽当たり 1 日当たり飼料消費量		11 kg	
	飼料要求率	成鶏		2.00
		全体		2.25
	育成率（初生雛）		100.0 %	
	育成率（中大雛）		100.0 %	
	成鶏淘汰・へい死率		100.0 %	
	成鶏補充率		100.0 %	
	鶏舎 1m ² 当たり年間鶏卵生産量		130 kg	
	鶏舎 1m ² 当たり成鶏飼養羽数		7 羽	
安全性	総借入金残高（期末時）		1,800 万円	
	成鶏 100 羽当たり借入金残高（期末時）		77,865 円	
	成鶏 100 羽当たり年間借入金償還負担額		25,954 円	

(2) 技術等の概要

経営類型	採卵養鶏	
飼養品種	後藤のもみじ	
鶏舎構造	育すう舎	開放
	育成舎	開放
	成鶏舎	開放 1ケージ1羽
生産	オールイン・オールアウトの実施	群別のオールインオールアウト
	強制換羽の実施	現在は実施していない
	デビークの実施	えつけ時
飼料	自家配合の実施	醗酵飼料
成鶏の更新方法	545 日齢で群別のオールインオールアウト	
GPセンターの有無	選卵選別	
インデグレーション参加の有無	無	
生産部門以外の取り組み	鶏卵直売所5ヵ所に自動販売機25台を設置するとともに「たまごかけ御飯」専用食堂への取り組み中である。	

6 家畜排せつ物の処理・利用状況

(1) 処理の内容

処理方式	
処理方法	たい肥化処理：毎日スクレーパーにより除ふんを行い、EM菌・A I-1 菌を散布し、戻したたい肥による水分調整を行いたい積、発酵（4ヵ月）切り返し（7回）、鶏ふん篩器で分別（12mm以下）し、袋詰めする。
敷 料	使用していない。

(2) 利用の内容

内容	割合 (%)	用途・利用先等	条件等	備考
販 売	100%	スーパー発酵鶏ふんとして地域内で販売している。	1袋(20kg)100円	

7 地域農業や地域社会との協調・融和のために取り組んでいる活動内容

熊野養鶏では、安全で安心して食べてもらえる卵を提供するために、平成 18 年より消費者との交流会を毎年開催している。鶏舎内の見学は防疫上から困難だが「熊²⁹」を利用し、生産の状況や卵についての情報を画像で紹介しながら生産現場の現状と卵の栄養などの理解醸成に努めている。

また、来店できない消費者のことも考えて、インターネットを活用しヒヨコの成長を写真付きで紹介したり家族の近況、地域のイベント情報などを提供したりするなど、消費者が普段目にすることができない生産現場と各種情報も積極的に提供し消費拡大に努めている。

環境整備のため、鶏ふん処理として EM 菌と AI-1 菌を散布することにより臭気が抑制されているため、周囲からは好評を得ている。

地域の農業・畜産と共栄・共存のための活動としては、平成 20 年に四国中央市青年農業者協議会の養鶏部会の部会長として地域養鶏の振興に寄与した。

夫人は平成 19 年に愛媛の畜産女性ネットワークの設立発起人として設立にかかわり、「めぐり愛・媛ネットワーク」の副会長として、リーダーシップを発揮するとともに愛媛の畜産の発展に貢献している。畜産物を使った料理教室や自作紙芝居の公演などを通じて、県内の消費者との交流や子どもたちへの食育活動を積極的に展開している。また、「熊²⁹」はこれらの活動打ち合わせ場所としても活用している。

8 今後の目指す方向性と課題

中小採卵養鶏農家の今後は、産卵成績などの技術水準は大規模養鶏に劣らないものとなっているため、これまで以上の技術向上は困難と考えている。

経営の安定と向上のためには流通面の改善が大切と考え、直販体制を整備するとともに、さらに新しい商品の開発（鶏飯（かしわめし）、卵豆腐、卵焼き、惣菜の製造・販売、親鳥の炭火焼きなど）による販路の拡大を図り、多角化することが少羽数規模で経営を安定させていくために求められるが、それらを実践する考えである。

すでに平成 21 年 12 月上旬から、破碎米を与え黄身を白くした卵で白いプリンを製造し、販売を開始している。